

# 運動活動後に指導者から与えられる 快／不快感情喚起メッセージの聴取と感情の変化

石倉 忠夫

本研究は、体育やスポーツにおける指導者からの快または不快感情喚起メッセージ聴取の継続と感情の変化との関係について検討した。大学生 48 名（男性 21 名）に主要 5 因子性格検査を実施し、逆上ガリを練習している場面を想定させ、一般感情尺度を用いて感情を評価させた。分析の結果、快または不快感情喚起メッセージを聴取させ続けると、受け手の感情はネガティブに作用した。そして「外向性」「情緒安定性」「協調性」の性格因子が感情の変化の差として現れた。

キーワード：快／不快感情、メッセージ聴取、体育・スポーツ指導

## 1. はじめに

体育授業やスポーツ活動の場において、指導者や他の活動者などから発せられる快または不快感情を喚起させるメッセージは、受け取り手の感情に作用し、活動に対する動機づけや学習方略、あるいは学習された技能の記憶などに影響すると考えられる。始めに本研究では本多(2012)にならい、情動を「急激に生起し、比較的短時間のうちに消失する強い感情」、気分を「数時間から数週間単位で持続する比較的弱い感情状態」と定義し(濱・鈴木・濱, 2001)、感情を情動や気分を含む包括的なものとして捉えることとする。

一般的にポジティブ感情は、社会的行動や思考過程、さらには課題が興味深く重要である限りにおいて意思決定や問題解決を促進することが知られている(Isen, 1999)。また、高橋(2007)は感情と認知の関係について概観し、情動の強さはある程度までは記憶に対して促進効果を与えるが、あまりにも過度に強くなると抑制効果を及ぼす。そしてポジティブな感情とネガティブな感情では思考や問題解決における情

報処理方略が異なる。つまり、ポジティブな感情は環境内に脅威が存在しない、ないしは生存にとって有益なものが存在するため、目の前の刺激を丁寧に処理する必要はない。一方、ネガティブな感情は環境内に何らかの脅威が存在するため、それらを回避するために目の前の刺激を丁寧に処理する必要がある。このような考え方に立ち高橋(2007)は感情の機能を検討していく一つの方向性を示している。

Isen(1999)や高橋(2007)より、先に述べたように、体育授業やスポーツ活動の場における指導者や他者からの言葉かけは快／不快感情を喚起するメッセージとして活動者の感情に作用し、その後の認知的機能や学習態度に大きく影響すると言えよう。例えば、小学生の体育授業あるいは体育活動において、指導者や他児童からの言葉を受けた経験が高いほど他者受容感が高まり(吉村・日角, 2005)、具体的な内容の言葉かけは学習意欲(江藤, 2015)や活動のめあての明確化に影響する(赤沢・築田・小沢・大友, 2013)ことが報告されている。また、個人内評価を重視した教師の言葉かけは個々の児童

にとって印象に残る教師との相互作用の機会が増え、児童の動機づけが適応的に高められること（長谷川, 2004）、そして否定的なフィードバックに比べ肯定的なフィードバックにより「やる気」が高まり、特に指導者が目標に合致した基準に従ったフィードバックを行うことの有効性が示唆されている（名取, 2007）。幼稚園の保育者の言葉かけは遊びにおける運動量や有能感、受容感が高まるという結果は得られなかったが、保育者の言葉かけが幼児の気持ちや表情、行動などに影響を与えている場面が多々見られた（大久保・岩崎, 2007）。また、大学生男女共修のダンス授業を展開する上で、仲間内で自分がグループのリーダーとして認められたり、動きの見本となったり、教師から承認の言葉かけをされたりすることが有能感を高める。加えて、女子では教師が自分に指導してくれたという満足感がより有能感を高める。しかし、教師が過剰に指導したり助言することは、ダンスに好意を抱かせることに対して逆効果になる。また、達成すべき目標が明確であり、その目標が達成できたことを教師からフィードバックされるとともに、そのことから仲間の中でリーダーシップをとり、運動面で見本となることがダンスの学習意欲を高め、ダンスを好きにさせ、有能感を高めるためにより重要であることが報告されている（内山・山路, 2012）。矢澤（2007）はスポーツにおける指導者による言葉かけと子どものやる気との関係について先行研究を概観したところ、子どもは指導者からの言葉を敏感に捉え、否定的な言葉かけは子どものやる気を低下させ、肯定的な言葉かけが子どものやる気を高めることが多くの研究で示されている。しかし、否定的な言葉かけであっても、その言葉かけの理由を子どもが肯定的に捉えている場合には、子どものやる気は高められていたことが報告されて

いる。また、叱り言葉であっても、子どもが叱り手である教師に良い感情を持っている場合にはその叱りの意図を善意に解釈していたことも報告されている。したがって、同じ言葉かけであっても、その影響がどのように現れるかは指導者と子どもの人間関係の状態や言葉かけが与えられた状況（文脈）に基づいて異なると考えられるため、これらの要素をより詳細に吟味して検討する必要があることを矢澤（2007）は指摘している。

石倉・藤本（2014）は体育授業時の教師からの言葉かけが学習者の快／不快感情を喚起し、学習態度に作用するという考えのもと、大学生を対象に体育授業で技能練習（例えば、バスケットのフリースロー）を想定したときに成功／失敗した時に快く感じる／不快に感じる指導者からのメッセージを明らかにしている。さらに、石倉（2015a, 2016）は主要5因子性格検査（村上・村上, 1999）を用いて学習者のパーソナリティーとの関連性について検討したところ、内向的な人は快感情を喚起するメッセージに快く反応しにくく、温かい人は冷たい人よりも失敗した時の快感情を喚起するメッセージに快く反応するなどパーソナリティーと快または不快感情喚起メッセージに対する反応との関連性が示されたことを報告している。また、石倉（2015b）はパフォーマンス後に与えられる快感情あるいは不快感情を喚起するメッセージが、学習者の気分の変化、心拍数、そして自律神経活動に及ぼす影響について検討した。その結果、快感情喚起メッセージが与えられると肯定的感情が上昇し、快感情喚起メッセージは不快感情喚起メッセージが与えられたときよりも心拍数が高くなるという傾向が示されたことを報告している。

これらの報告から、教師や他者の言葉かけが受け手の快または不快感情を喚起させ、学習に

対する意欲や態度に影響するといえよう。しかしながら、快または不快感情を喚起させるメッセージを聴取し続けた場合、例えば、快感情喚起メッセージを聞き続けた場合に受け手の感情はポジティブに変化するのにかきか疑問が残る。一般的に褒めて育てることが受け手を肯定的な気持ちにさせ、学習効果を期待するという風潮にあるが、内山・山路（2012）が報告するように、指導者からの働きかけが過剰になると返ってネガティブな感情を喚起させるが予想できる。そこで本研究は、石倉・藤本（2014）が報告した快／不快感情喚起メッセージを用い、このメッセージを聞き続けたときの感情の変化について検討することを目的とした。なお、感情の変化については一般感情尺度（小川・門地・菊谷・鈴木、2000）を用いて評価することとした。

## 2. 方法

本実験は同志社大学「人を対象とする研究計画等倫理審査」に申請し、倫理審査委員会の承認を得た上で実施した。

### (1) 被験者

本実験に未経験な健康な大学生 48 名（平均年齢 20.6 歳、SD1.8 歳）を被験者とした。内訳は男性 21 名（平均年齢 21.5 歳、SD2.3 歳）、女性 27 名（平均年齢 19.9 歳、SD0.9 歳）であった。

### (2) 課題

体育の授業をイメージし（例えば逆上がりを練習している場面）、快および不快感情喚起メッセージを聴取し続けたときの被験者自身の感情について評価することを課題とした。なお、快および不快感情喚起メッセージは石倉・藤本（2014）で報告されたメッセージ（快感情喚起メッセージ：18 メッセージ、不快感情喚起メッ

セージ：28 メッセージ）を使用した。メッセージ提示には大学生演劇サークルの男性及び女性役者（いずれもサークルにおける役者暦 3 年）にスポーツ指導者として演技させたときにメッセージを発話させたものを音声ファイルとして記録し、これをパーソナルコンピュータでランダムな順序で再生した。

### (3) 手順

実験は被験者一人ずつで、各質問項目に回答するために机上に設置したパーソナルコンピュータの正面に着席する形で実施した。

実験手順について説明後、始めに被験者にパーソナリティ検査として主要 5 因子性格検査（The Big Five Personality Inventory、以下 BigFive）（村上・村上、1999）を実施した。BigFive は 70 項目の質問に対し、「はい」「いいえ」のいずれかで回答する形式である。回答の結果から基本尺度として「外向性」「協調性」「勤勉性」「情緒安定性」「知性」について評価できる。また、各尺度の高得点（標準得点 56 点以上）と低得点（標準得点 44 点以下）の組み合わせにより 40 のタイプに分けることが出来る（村上・村上、1999、2008）。次に安静時の感情を評価するために一般感情尺度（小川・門地・菊谷・鈴木、2000）を実施した。一般感情尺度は 24 項目の質問に対し「全く感じない」から「非常に感じている」の 4 件法で回答する形式で、回答から全体的な感情状態を「肯定的感情」「否定的感情」「安静状態」の 3 つの下位尺度について評価できる。各尺度の合計得点が高いほどその感情および状態が高いと判断できる（堀、2011）。両質問項目は心理学実験ソフトウェア E-Prime2.0 Professional（Psychology Software Tools 社製）を用いてモニタ上に提示し、キーボードを用いて回答させた。

次に被験者に快または不快感情喚起メッセージを3分間聴取させた。快感情喚起メッセージを始めに聴取させた被験者には、10分間の休憩を挟んで不快感情喚起メッセージを聴取させた。逆に、不快感情喚起メッセージを始めに聴取させた被験者には、10分間の休憩を挟んだ後に快感情喚起メッセージを聴取させた。この順番は被験者毎にランダムに振り分けた。3分間のメッセージ聴取時に、被験者に一般感情尺度を用いて被験者自身の感情状態について評価させた。評価を実施させたのはメッセージを聞き始めてから15秒後、1分45秒後、3分45秒後と4分45秒後の合計4回であった。したがって、1回目と2回目の評価ではメッセージを聴取しながらの評価、一方、3回目と4回目の評価は、メッセージ提示が既に3分で終了しているため、メッセージを聴取していない状態で評価するということになる。

#### (4) 依存変数

感情の変化を検討することを目的として、安静時（メッセージ聴取前）、聴取開始15秒後、1分45秒後、3分45秒後と4分45秒後の一般感情尺度における「肯定的感情」「否定的感情」「安静状態」の下位尺度の標準得点。そして、感情の変化とパーソナリティとの関連性を検討するためにBigFiveにおける各下位尺度の標準得点を取り上げた。なお、一般感情尺度の標準得点算出には小川ら（2000）の調査3で得られた平均値と標準偏差から算出し、BigFiveにおける各下位尺度の標準得点は村上・村上（1999）により適応した。

### 3. 結果

分析には統計解析パッケージIBM SPSS Statistics 24（IBM社製）を用いた。

#### (1) 男女差について

BigFiveおよび一般感情尺度における各下位尺度の男女差について一要因分散分析を用いて検討した。その結果、全ての下位尺度において有意差は認められなかった。よって、この後の分析においては性別要因を省いて検討する。

#### (2) 快／不快感情喚起メッセージと感情の変化の関係について

安静時の一般感情尺度の各下位尺度の標準得点を基準とし、メッセージを聞き始めてから15秒後（1回目）、1分45秒後（2回目）、3分45秒後（3回目）と4分45秒後（4回目）の標準得点との差を求めた。そして感情喚起メッセージ（快／不快）×テスト要因（安静時／1回目／2回目／3回目／4回目）の2要因2繰り返しによる分散分析を行った。なお多重比較にはBonferroni法を用いた。

表1は肯定的感情尺度における各感情喚起メッセージ聴取別の平均値と標準偏差の一覧である。分散分析の結果、テスト要因による主効果に有意差が認められ（ $df=4/188$ ,  $f=18.80$ ,  $p=.001$ ,  $\eta^2=.29$ ,  $pw=1.00$ ）、多重比較の結果から安静時の得点が1回目から4回目の得点よりも高得点であったことが示された（図1）。

表2は否定的感情尺度における各感情喚起メッセージ聴取別の平均値と標準偏差の一覧である。分散分析の結果、テスト要因による主効果に有意差が認められた（ $df=4/188$ ,  $f=8.91$ ,  $p=.001$ ,  $\eta^2=.16$ ,  $pw=1.00$ ）。多重比較の結果から、安静時は1回目よりも低得点、1回目は3・4回目よりも、第2回目は4回目よりも、3回目は4回目よりも高得点であった（図2）。

表3は安静状態尺度における各感情喚起メッセージ聴取別の平均値と標準偏差である。分散分析の結果、テスト要因による主効果に有意差

が認められ (df=4/188, f=62.52, p=.001, eta=.57, pw=1.00)、安静時の得点が最も高く、1・2回目は3・4回目よりも低得点で、3回目は4回目よりも低得点であった (図3)。

(3) 感情の変化とパーソナリティとの関係について

BigFiveの各下位尺度と一般感情尺度の下位尺度との関連性を検討するために、Pearsonの相関係数を求め、2変量の相関関係を両側検定にて検討した。表4は相関係数の一覧をまとめたものである。

快感情喚起メッセージにおいて、肯定的感情

尺度4回目と情緒安定尺度間 (r=-.34, p<.05)、否定的感情尺度2回目から4回目と外向性尺度間 (2回目:r=.30, p<.05, 3回目:r=.37, p<.01, 4回目:r=.42, p<.01)、否定的感情尺度4回目と情緒安定性尺度間 (r=.29, p<.05)に有意な相関係数が示された。また、肯定的感情尺度3・4回目と建前項目間 (3回目:r=-.30, p<.05, 4回目:r=-.34, p<.05)に有意な相関係数が示された。

一方、不快感情喚起メッセージにおいては安静状態尺度3回目および4回目と協調性尺度間に有意な相関係数が示された (3回目:r=-.33, p<.05, 4回目:r=-.32, p<.05)。

表 1. 安静時を基準とした一般感情尺度における肯定的感情尺度標準得点差の平均値と標準偏差

	メッセージ				合計	
	快感情		不快感情		平均値	標準偏差
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
1回目	-4.52	11.03	-8.03	10.70	-6.28	10.89
2回目	-4.71	12.67	-8.83	14.34	-6.77	13.54
3回目	-3.47	11.88	-8.76	13.29	-6.11	12.75
4回目	-2.63	11.60	-7.70	12.72	-5.16	12.31

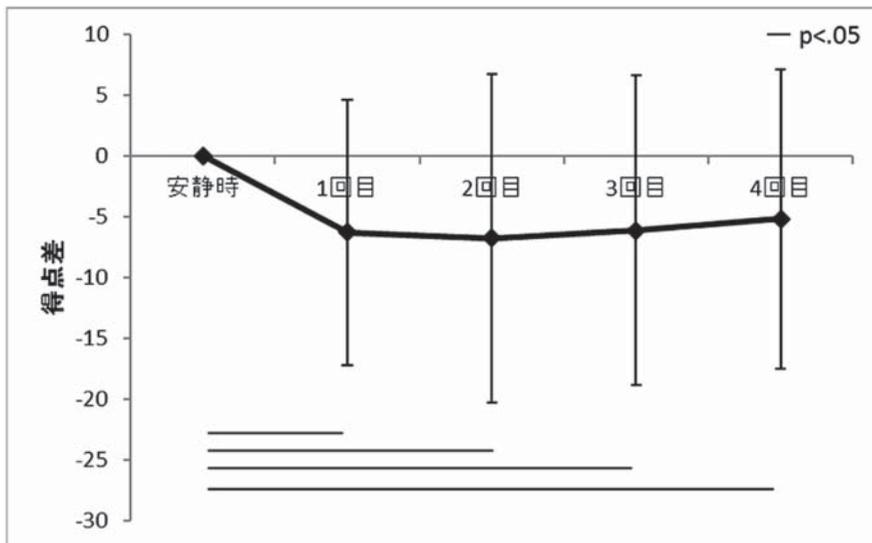


図 1. 安静時を基準とした一般感情尺度における肯定的感情尺度標準得点の変化

表 2. 安静時を基準とした一般感情尺度における否定的感情尺度標準得点差の平均値と標準偏差

	メッセージ				合計	
	快感情		不快感情		平均値	標準偏差
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
1回目	2.99	11.61	8.48	16.14	5.73	14.18
2回目	3.11	13.75	6.66	15.95	4.89	14.84
3回目	2.06	12.47	4.28	16.14	3.17	14.32
4回目	-0.12	11.35	2.34	15.44	1.11	13.46

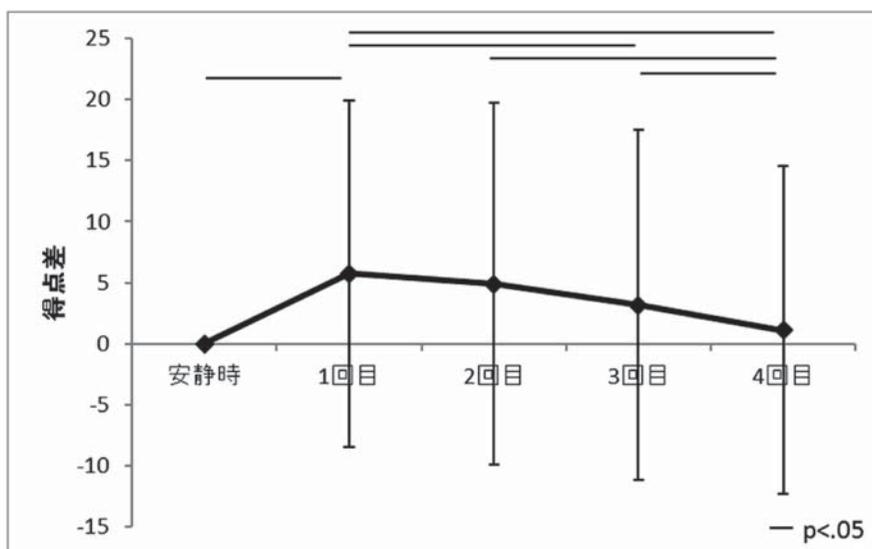


図 2. 安静時を基準とした一般感情尺度における否定的感情尺度標準得点差の変化

表 3. 安静時を基準とした一般感情尺度における安静状態尺度標準得点差の平均値と標準偏差

	メッセージ				合計	
	快感情		不快感情		平均値	標準偏差
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
1回目	-13.35	11.89	-17.56	13.50	-15.46	12.76
2回目	-12.88	12.59	-16.86	12.86	-14.87	12.75
3回目	-10.08	12.88	-10.59	12.72	-10.34	12.67
4回目	-3.74	12.32	-6.81	12.28	-5.28	12.27

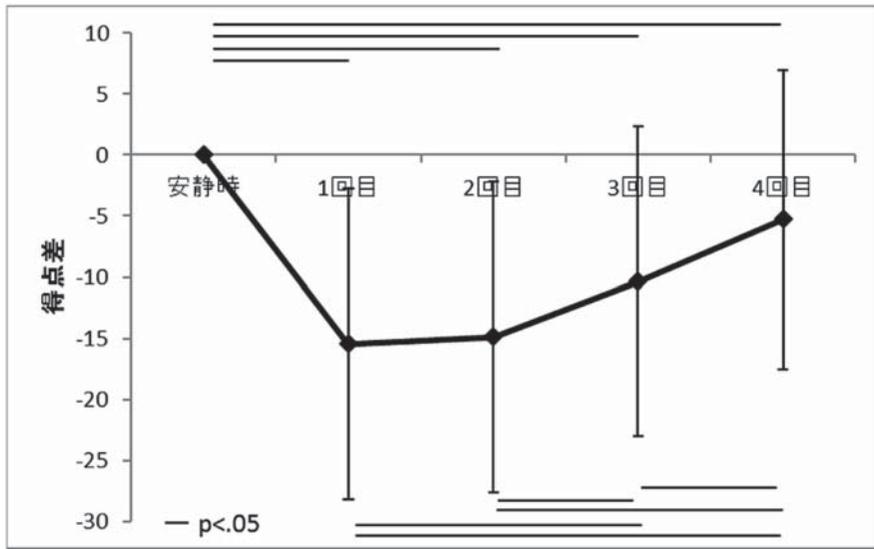


図3. 安静時を基準とした一般感情尺度における安静状態尺度標準得点の変化

表4. 主要5因子性格検査における各下位尺度と一般感情尺度における各下位尺度との Pearson の相関係数

係数

一般感情尺度	感情喚起メッセージ	測定回	主要5因子性格検査						
			頻度	建前	外向性	協調性	勤勉性	情緒安定性	知性
肯定的感情	快	1	.05	-.14	-.21	.04	.05	-.20	-.13
		2	-.04	-.22	-.20	.04	.18	-.27	-.09
		3	-.04	-.30*	-.23	.09	.11	-.28	-.08
		4	.07	-.34*	-.19	-.01	.05	-.34*	-.16
	不快	1	.18	.14	.10	-.19	-.01	-.09	.05
		2	.19	.13	.17	-.26	-.16	-.06	.08
		3	.18	.09	.21	-.23	-.11	-.04	.01
		4	.22	.03	.08	-.2	-.09	-.11	-.01
否定的感情	快	1	.07	.03	.18	-.03	-.18	.08	-.01
		2	.09	.11	.30*	-.05	-.18	.22	-.09
		3	.04	.08	.37**	.05	-.20	.22	-.15
		4	-.04	.10	.42**	.09	-.19	.29*	-.18
	不快	1	-.13	.03	.22	.17	.11	.18	-.07
		2	-.09	-.03	.13	.12	.09	.15	-.14
		3	-.05	-.08	.05	.15	.05	.14	-.15
		4	.00	-.03	.11	.12	.06	.11	-.08
安静状態	快	1	-.16	-.17	-.08	.17	.24	-.13	-.10
		2	-.18	-.22	-.14	.23	.21	-.21	-.02
		3	-.25	-.06	-.15	.18	.20	-.05	.06
		4	-.19	-.11	-.18	.22	.10	-.05	.05
	不快	1	.13	.04	.11	-.20	-.07	.01	.13
		2	.19	.05	.13	-.26	-.14	-.01	.13
		3	.25	.11	.11	-.33*	-.05	-.02	.18
		4	.16	.10	-.05	-.32*	.04	.03	.12

\*p<.05 \*\*<p.01

#### 4. 考察

本研究はスポーツや体育活動時の指導者からの快あるいは不快感情を喚起させるメッセージを聴取し続けた場合の感情の変化について検討した。感情の変化について一般感情尺度（小川ら, 2000）を用い、メッセージ聴取前からの変化を検討した。その結果、いずれの尺度においても快感情喚起メッセージ聴取時と不快感情喚起メッセージ聴取時の間に得点差が認められなかった。一方、いずれの尺度においても繰り返し要因による主効果に有意差が示された。肯定的感情尺度（図1）において聴取開始直後（1回目測定）から4分45秒後（4回目測定）にかけて安静時よりも得点が下がり、肯定的感情は低下したままであったことが示された。否定的感情尺度（図2）では、安静時から聴取開始直後（1回目測定）にかけて否定的感情が上昇するものの、徐々に下降していくという特徴が示された。安静状態尺度（図3）では安静時から聴取開始直後（1回目測定）にかけて下降するがものの徐々に上昇する。しかしながら4分45秒後（4回目測定）に至っても聴取前の安静時よりも低得点であるという特徴が示された。つまり、本実験で得られた感情の変化の特徴として、本実験では快／不快感情喚起メッセージ聴取による一般的感情尺度得点に及ぼす影響は見られなかったが、全体的に見て快または不快感情喚起メッセージを聴取すると肯定的感情は低下する、否定的感情は上昇するが時間をかけて安静時に戻る、そして安静ではない状態になるが時間をかけて安静時に戻るといった消極的な感情の変化が見られたと言えよう。

小学生や幼稚園児を対象とした指導者あるいは他者からの言葉かけの効果について検討した先行研究から、肯定的な言葉かけは否定的な言葉かけに比べて小学生や幼稚園児のやる気を高

めることが報告されている（例えば、名取, 2007；大久保・岩崎, 2007；矢澤, 2007）。しかしながら、大学生男女共修のダンス授業においては、教師が過剰に指導したり助言するなどの関わりが増すと、ダンスに好意を抱かせることに支障になることが報告されている（内山・山路, 2012）。また、本研究に参加した被験者からの内省から、快感情喚起メッセージを聴取し続けることに対して「知らない人からいわれたくない」「うるさすぎる」「しつこい」「嫌味に聞こえる」「現実感に乏しく、暇であった」など否定的な感情を抱いたという報告も得られている。したがって、言葉掛けを行う対象者の年齢や快感情メッセージを与える頻度やタイミングの側面から検討する余地が指摘される。

感情の変化とパーソナリティとの関係について、本研究ではBigFive（村上・村上, 1999）の各下位尺度と一般感情尺度（小川ら, 2000）の各下位尺度を用いて検討した。分析の結果、中程度以上の強い有意な相関関係は認められなかったが、快感情を喚起するメッセージが与えられると外向性尺度の得点が高いほど否定的感情が高くなる。そして、快感情喚起メッセージの聴取が終わって時間が経過すると、情緒安定性尺度得点が高いほど肯定的感情が低く否定的感情が高いという特徴が示された。村上・村上（1999）によると、外向性尺度の高得点者は「社会的、外向的、積極的で、社会的刺激に左右される」、一方の低得点者は「交際嫌い、内向的、消極的で、社会的刺激に無関心である」と解釈できるとしている。したがって、社会的刺激に左右されやすい外向性尺度の高得点者は快感情喚起メッセージの内容というよりは、むしろメッセージを聞き続けなければならない状況に対して否定的に感じていたと推察される。また、情緒安定性尺度の高得点者は「気楽で、自信が

あり、仕事をやり通す」、低得点者は「神経質で、不機嫌になりやすく、仕事や生活がうまくいかない」と解釈できるとしている。すなわち、情緒安定性の高い被験者は快感情喚起メッセージの聴取が終了しても情緒の変動が小さいため、感情の変化が見られなかったと推察される。また、不快感情を喚起するメッセージの聴取が終了したあと、協調性尺度得点が高いほど安静状態にあるという特徴が示された。協調性尺度の高得点者は「正直で、親切、暖かい、人を信じやすい」、低得点者は「利己的、不親切、独りよがり、疑い深い」と判定できる(村上・村上, 1999) ため、協調性尺度得点が高得点である者ほど状況の変化を受入れることができ気持ちが変化したと推察される。石倉 (2015a, 2016) は BigFive (村上・村上, 1999) を用いてパーソナリティと快／不快感情喚起メッセージに対する反応について検討した結果、内向的な人は快感情喚起メッセージに快く反応しにくいことを報告している。したがって、本実験で示されたように、社会的刺激に左右されやすい外向性尺度の高得点者はメッセージを聞き続けなければならない状況に対して否定的に感じたとの推察を裏付けるものと考えられる。

以上より、本研究の結果から快／不快感情喚起メッセージを聴取させ続けると、受け手の感情はネガティブに作用する、そしてパーソナリティの違いが感情の変化の差として現れたと言える。ただし、快感情喚起メッセージの内容というよりは与え方が大きく影響したものと考えられたため、今後はメッセージの与え方(例えば、時間や頻度、文脈、現実感など)を主眼に置きながら、メッセージの影響を受けやすいパーソナリティ(例えば感受性など)や感情の評価法を簡潔にするなど、実験方法や測定尺度を精査して検討する必要性が課題として指摘

されよう。

## 【謝辞】

本研究は MEXT 科研費 JP26350734 研究課題「情意的フィードバックメッセージが運動学習に及ぼす影響」の助成を受けたものです。

## 引用・参考文献

- 1) 本多麻子, 2章 感情・情動の生理学的機序. 山崎勝男監修, スポーツ精神生理学. 2012, pp26-37, 西村書店.
- 2) 濱治世・鈴木直人・濱保久, 感情心理学への招待: 感情・情緒へのアプローチ. 2001, サイエンス社.
- 3) Isen, A.M., Chapter 25 Positive Affect. In Dalglish, T., and Power, M.J. Edts. Handbook of Cognition and Emotion, 1999, pp521-539, Wiley.
- 4) 高橋雅延, 3. 感情と認知. 鈴木直人編・海保博之監修, 朝倉心理学講座 10 感情心理学. 2007, pp36-47, 朝倉書店.
- 5) 吉村功・日角知世, 体育における教師や仲間からの言葉かけが他者受容感に及ぼす影響. 北海道教育大学紀要(教育科学編), 56 (1), pp183-192, 2005.
- 6) 江藤真生子, 小学校体育授業における教師の「言葉かけ」の検討 —表現運動とゲームの授業を事例として—. (社)日本女子体育連盟学術研究, 31, pp47-57, 2015.
- 7) 赤沢真世・築田尚晃・小沢道紀・大友智, 大学生のサービスマーケティングにおける運動指導が小学校の体育的活動に及ぼす影響の検討 —草津市における長縄オリエンテーションを対象として—. 立命館高等教育研究, 13, pp107-120, 2013.
- 8) 長谷川悦示, 小学校体育授業における「個人の進歩」を強調した教師の言葉かけが児童の動機づけに及ぼす効果. スポーツ教育学研究, 24 (1), pp13-27, 2004.
- 9) 名取洋典, 指導者のことばかけが少年サッカー競技者の「やる気」におよぼす影響. 教育心理学研究, 55, pp244-254, 2007.
- 10) 大久保英哲・岩崎裕香, 幼稚園に於ける保育者の役割についての研究 —保育者の言葉かけが幼児の遊び行動に及ぼす影響—. 金沢大学教育学部教育工学研究・実践研究, 33, pp31-42, 2007.
- 11) 内山須美子・山路学, 「現代的なリズムのダンス」の学習意欲・好意・有能感に関する研究. 白鷗大学教育学部論集, 6 (1), pp67-90, 2012.

- 12) 矢澤久史, 指導者の言葉かけが子どものやる気と認知に及ぼす影響. 東海学院大学紀要, 1, pp211-217, 2007.
- 13) 石倉忠夫・藤本愛子, パフォーマンス後に快/不快感情を喚起する情意的フィードバックメッセージ. 同志社スポーツ健康科学, 6, pp47-56, 2014.
- 14) 石倉忠夫, 運動後に指導者から与えられる快/不快感情喚起メッセージと学習者のパーソナリティーとの関連性. 京都文教短期大学研究紀要, 53, pp79-89, 2015a.
- 15) 石倉忠夫, 運動後の指導者からの快/不快感情喚起メッセージへの反応と学習者のパーソナリティーとの関係 -主要5因子性格検査を用いて-. 京都文教短期大学研究紀要, 54, pp1-10, 2016.
- 16) 村上宣寛・村上千恵子, 主要5因子性格検査の手引き. 学芸図書, 1999.
- 17) 石倉忠夫, タイミング技能学習における情動喚起フィードバックメッセージが学習者の気分と生理心理的指標に及ぼす影響. 同志社スポーツ健康科学, 7, pp17-22, 2015b.
- 18) 村上宣寛・村上千恵子, 主要5因子性格検査ハンドブック改訂版—性格測定的基础から主要5因子の世界へ—. 学芸図書, 2008.
- 19) 小川時洋・門地里絵・菊谷麻美・鈴木直人, 一般感情尺度の作成. 心理学研究, 71, pp241-246, 2000.
- 20) 堀洋道監修・吉田富二雄・宮本聡介編, 心理測定尺度集V 個人から社会へ<自己・対人関係・価値観>. 2011, pp76-80, サイエンス社.